

取材／武田宏
文／清水洋一

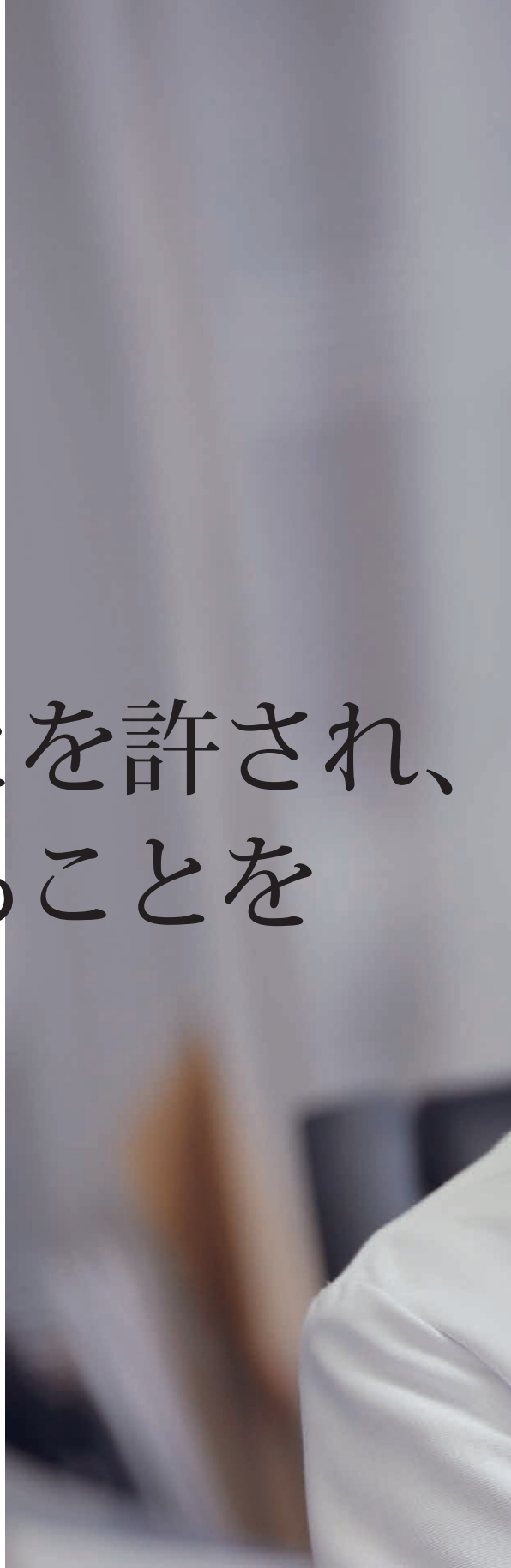
MY OPINION

—明日の薬剤師へ—

「師」を名乗ることを許され、
患者の近くにいることを
期待されている。

独立行政法人地域医療機能推進機構東京山手メディカルセンター院長

万代 恭嗣



つい先日まで調剤室にこもっていた。 だから、背中を押すだけでは足りない。

薬学教育6年制時代の薬剤師への期待は大きい。

「元来、薬剤師が医療に貢献できる度合い、活躍できる可能性はたいへんな埋蔵量でした。加えて6年制という新しいカリキュラムのもとで臨床実習などを拡充させた教育を受けられるわけですから、大きなブレイクスルーを経て、薬剤師の新しい時代がやってくるのは確実だと思います」

独立行政法人地域医療機能推進機構（以下、JCHO）東京山手メディカルセンター院長の万代恭嗣氏は、1980～1990年代に腹部超音波穿刺術の開発に取り組んだ実績が高く評価され、「幕内雅敏、万代恭嗣、伊藤徹、渡邊五朗は腹部超音波における東大の四天王」とまで称された消化器外科医。

2009年に院長（当時は社会保険中央総合病院）に就任した当初から、チーム医療における薬剤師の存在を重視し、臨床に進出するよう強く促してきたリーダーで、新教育制度による、これまで以上に有能な人材の輩出に大きな期待を寄せるひとりだ。

「私は、医師と薬剤師は、ともに『師』の冠を許され、患者さんの近くで医療を提供する使命を果たす同朋と考えてきました。もっともとつとつできるはずだとの思いを、さまざまな局面で抱いたものです」

ただ、調剤室にこもっていたのは、つい先日までのことです。臨床に進出するにあたっては背中を押すだけでなく、医師や看護師が時には支え、時には軌道修正の手助けをしてあげなくてはなりません」

軌道修正の手助け——具体的には。

「薬剤師は決して、暇をもらって新しい進出分野を探ったわけではありません。これまでの裏方に徹した業務だ

けでも十分に多忙で、臨床への進出に足踏みする、あるいは躊躇する気持ちがあっても当然と言えは当然なのです」

そこで私は、薬剤師に向けて『臨床は面白いんだよ』の一言を、機会があるごとに発します。そして、少しでも長く患者さんに触れられるような環境づくりを心配っています。患者さんに触れる時間が増えれば、臨床の奥深さややり甲斐を体感できますから。いつしか、自ら進んでベッドサイドに足を運ぶことを希望するようになるはずです」



医師と薬剤師に共通する「師」のファクターについて、さらに突っ込んで聞いた。

「相對する患者さんの病態は一人ひとり違い、症状や気持ちの動きは千差万別で日によって変わります。マニュアルだけではどうにもなりませんから、臨床家は知識や経験から最善の組み合わせを導き出し、かつ、それを患者さん本人にわかりやすく伝えることまでを求められる。そういった難易度の高さと、裏腹にあるやり甲斐の大きさこそが臨床の魅力ですし、資格を持った私たちだけが味わえる醍醐味なのだと思います」

長い医師人生の中で研修指導医はもちろん、研修医指導を統括する役割も経験した医療人としてのアドバイスは説得力に満ちている。

「臨床の経験知を後進に引き継ぐには、教育のメソッドロジック（方法論）が必要です。私の歩んだ外科医の世界でも、ある時期まで『手技は見て覚えろ』に端を発したであろう『臨床は見て覚えろ』が幅を利かせていました」

でも、そんなやり方には限界があります。私はある時期から、教える側が教わる人に見せた手技も処方も、なぜそうなったのか、なぜそれを選んだのかを整理し、説明して伝える重要性に気づき、実践しています。以降、研修医たちの伸びは、見違えるほどになりました。

薬剤師が薬剤師に伝承する臨床の経験も、ぜひ、そんなメンドロジーにもとづいたものとなってほしいです。もちろんメンドロジー確立には医師も手を貸せますし、貸す義務があると考えています」



万代恭嗣なる人物を理解するにあたっては、「多忙、激務をいとわない人」と、とらえるところから始めていいだろう。

2011年10月、社会保険中央総合病院の院長の立場で中央社会保険医療協議会（中医協）の診療側委員を引き受ける。2年に一度の診療報酬改定に向けては、前年秋から冬に委員として膨大な数の会合をこなし、膨大な量の書類に目を通し、複雑かつ重要な決定事項への考えをまとめていかなければならない。その間、接触し、意見を交わす関係者の数も数え切れないはずだ。

しかも、委員としての2度目の改定シーズンとなった2014年は、社会保険病院等が運営移管により、JCHOの直接運営となる大改革が施行される年だった。社会保険中央総合病院は、東京山手メデイカルセンターに名称変更し、民間病院から独立行政法人となった。万代氏自身、ユーマアを込めて「天上がり」と称するように、運営形態は

他に例がないほどドラスティックに変わった。

自身の足もとが創立以来の大変革に揺れる中、医療界の耳目を集める診療報酬改定作業のミッションにも取り組んでいたのである。どちらかひとつでも十分に重責であるのに、両者を並行して成し遂げるとは、まったくもって驚きを禁じえない。

2014年度診療報酬改定の全貌が厚生労働省から正式発表された後の3月、取材時に当時は振り返った万代氏は、微笑みながら、大判の白板に描かれたスケジュール管理用のカレンダーを指さし、つぶやいた。

「12月から1月の間は、秘書が、『もう、この1日分のマスに、どうやっても全部書き込めません』とこぼしていました（笑）。文字どおり分刻みの日々でした」

高い処理能力がなければ、与えられたミッションへの使



薬剤師の臨床経験の伝承に 医師は手を貸す義務がある。

社会保険中央総合病院から 東京山手メデイカルセンターへ。

命感がなければ、乗り切れるはずの数ヶ月への驚きをぶつけると、するりと体をかわされた。

「一歩ずつ進んでいけば、なんとかなるものですよ。事実なんとかなった。そんなものです」

今回の診療報酬改定は、病院や保険薬局に特に厳しかったと言われる。

「全体を通して言えば、改定内容は病院には厳しかったと思います。これは、前回、前々回とつづけて病院に有利な改定でしたので、ある程度は予想されていましたが――」。

7対1入院基本料の算定基準として新たな基準での重症者の割合が15%（がん専門病院は10%）以上と定められた点や、ある状態の患者さんは平均在院日数の計算対象から除外できた特定除外制度の廃止などは、確実に病院経営を厳しくします。しかし、2025年までに少子高齢社会にあるべき医療のかたちを整える国の方針は確固たるものであるべき医療のかたちを整える国の方針は確固たるものであるために医療機関に機能分化を促す考えは、多くの医療人が理解しています。受け手ごとに温度差はありますが、総じて関係者は納得していると感じます」

病院の経営環境が厳しくなったその年に、運営形態の大転換を指揮するのは並大抵の仕事ではないはずだ。特に万

代氏の身に降りかかった転換は、それまで民間病院として大きな自由裁量を与えられていたものが、独立行政法人という名の公の機関として、さまざまな制約を課されたものへと不条理なまでに切り替わった転換なのである。

しかも、運営上の制約に加え、公の医療機関ならではの政策医療のミッションも新たに付されている。

「新しくJCHO直轄の病院グループとなった社会保険病院等は、各病院のこれまでの実績を生かしながら、国民が要望する多様なニーズに応えるために、全国規模のグループとして『急性期医療×回復期リハビリ×介護』といった一連の医療をシームレスに提供し、地域医療、地域包括ケアの確保に取り組んでいきます」。

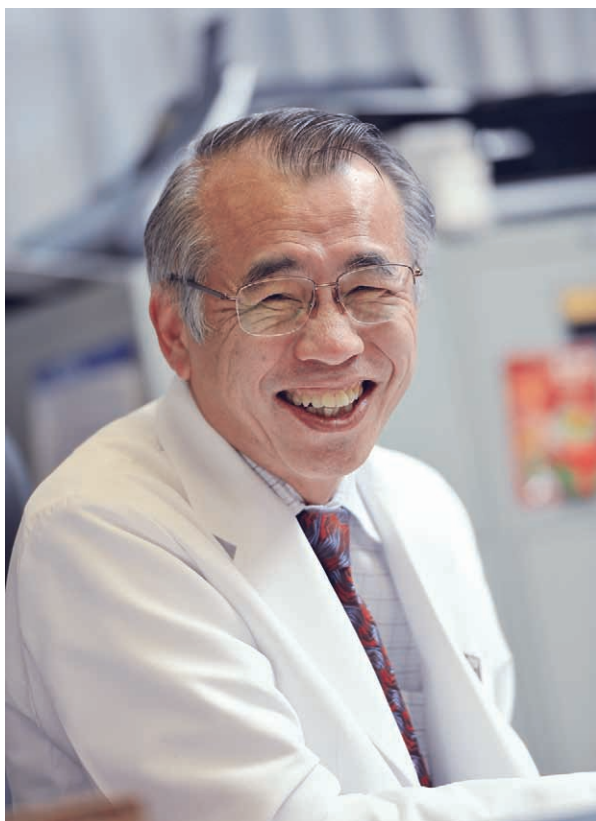
総合診療医の育成や地域医療、地域包括ケア連携の要となる医療人育成にも力を入れていくことになりました」



同院は社会保険中央総合病院だった当時、急性期医療に特化した方針を持っていたはずだ。

「急性期に軸足を置いた基本的な方針を変えるつもりはあ

薬剤師の手助けなしには一歩も
前に進めないとわかってる。



PROFILE

(ばんだい・やすつぐ)

- 1974年 東京大学卒業
- 1975年 竹田綜合病院外科
- 1977年 東京大学医学部附属病院
- 1980年 国立国府台病院外科
- 1981年 東京大学医学部外科学第二講座
- 1987年 社会保険中央総合病院外科部長
- 1995年 東京大学医学部外科学第二講座助教授
- 2009年 社会保険中央総合病院院長
- 2011年 中央社会保険医療協議会委員
- 2014年 独立行政法人地域医療機能推進機構東京山手メディカルセンター院長

りません。急性期病院だからといって地域医療、地域包括ケアに参加できないとは思っていません。急性期病院ならではのかかり方をめざしていく考えです」

ある意味、自らも手を貸して新しく制定した厳しい診療報酬体系のもと、国からの厳しい要求が舞い込むだろう。独立行政法人に衣替えした病院の経営を託されている。宗教寓話の受難の章かと思ふうハードなシークエンスに際し開き直る風情もなく、不用に眉間に皺を寄せもしない。「やることをやれば、うまくいく」と、自分と自分の組織に信頼を寄せる目は冷徹を発している。

ハードワークをいとわず、大音量では発言しない。現代の、確信に裏打ちされたプロフェッショナルはかくあるものなのかと納得させられた。

インタビューでは、同院の今後のあり方について具体的なビジョン、具体的な方策をいくつも聞かせてくれた。中には、薬剤師を登用した新しい医療サービスの案も含まれ

ていた。他院の外来や病棟において、薬剤師が活躍する先進事例をしっかりとリサーチし、咀嚼しているのがよくわかる。つまり、東京山手メディカルセンターの未来の明るさが感じ取れた。

最後に、万代氏が同朋と称える薬剤師に向けてのエールを聞こう。

「治療技術が高度化すればするほど、薬物療法の重要性は増し、薬剤師が果たす役割は大きくなっていく一方です。臨床医の私の実感としても、薬剤師の手助けなしには一歩も前に進めないとよくわかっていくつもりです。

まず、期待の大きさを正確につかんでいただきたい。そして、新しい薬学教育の新たな体制がつけられた意味を理解し、臨床の面白さをさまざまな場面で体得して欲しい。

医師と薬剤師がともに研鑽に励むことが、日本の医療をより良い方向に導くと信じています」